

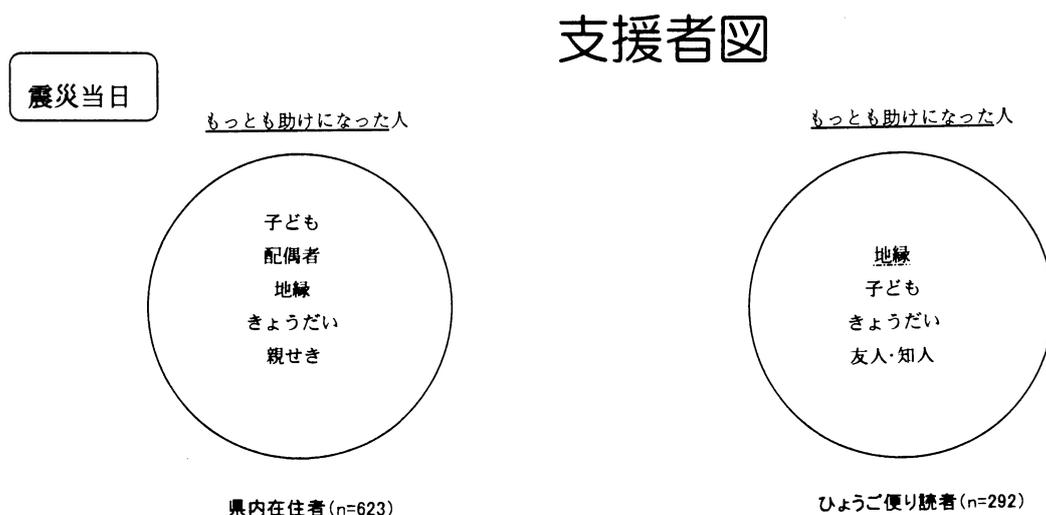
3. 支援者について

震災後の各時点において、回答者をどのような人々や組織が支援したかについてたずねた。震災当日の時点では「あなたは、震災当日に、誰かに助けられましたか」とたずね、震災後2-4日間、震災後2ヶ月、震災後半年の各時点においては「精神面」「物質面」「情報面」での各側面において、誰に助けられたかをたずねた(複数回答可)。

① 支援者の豊かさとそのバラエティ

震災後の各時点において、回答者をどのような人々や組織が支援したかについてたずねた。震災当日の時点では「あなたは、震災当日に、誰かに助けられましたか」とたずね、震災後2-4日間、震災後2ヶ月、震災後半年の各時点においては「精神面」「物質面」「情報面」での各側面において、誰に助けられたかをたずねた(複数回答可)。

震災当日もっとも助けになった人は、県内では、子ども(7.5%)、配偶者(6.6%)、地縁(5.2%)と続いたのに対し、ひょうご便利読者においては、地縁が約2割と平均値の2倍以上の高い割合を示した。以下、子ども(15.1%)、きょうだい(11.3%)、友人・知人(9.6%)も高い割合を示し、ひょうご便利読者が、震災当日に様々な人の助けをかりていたことがわかった。



震災後2-4日間、震災後2ヶ月、震災後半年における、精神面・物質面・情報面で助けになった人を見ていくと、県内在住者においては、震災後2-4日間では、精神面では配偶者、物質面では親せき、情報面では組織ネットワークを支えにしていた。また、この時点においてのみ、地縁、友人・知人を情報面での支えにしていた。

震災後2ヶ月以降になると、すべての面で子どもを支えにし、精神面・物質面では配偶者を支えにしていた。また、物質面での支えとして、両親、きょうだい、親せきなど血縁を支えにしていた。また、職縁・仕事縁は、震災後2-4日間には物質面・情報面で、震災後2ヶ月以降では物質面で支えにしていた。

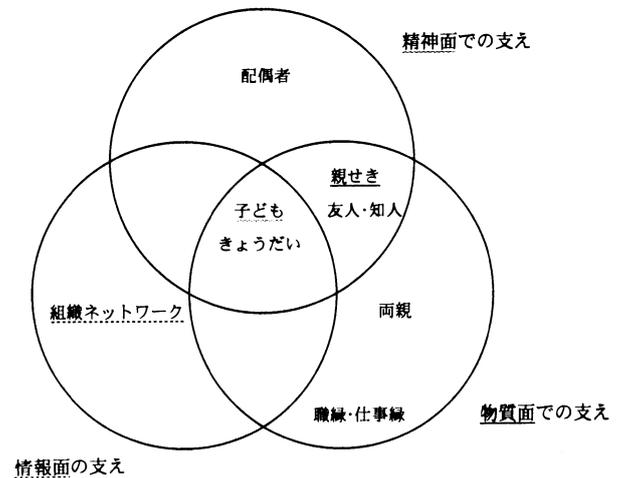
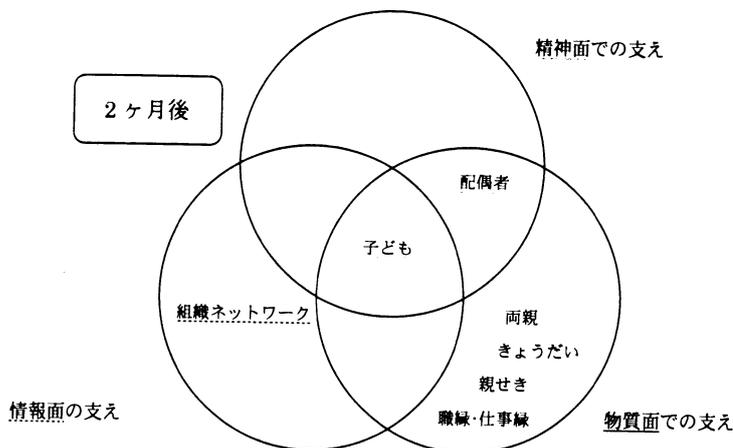
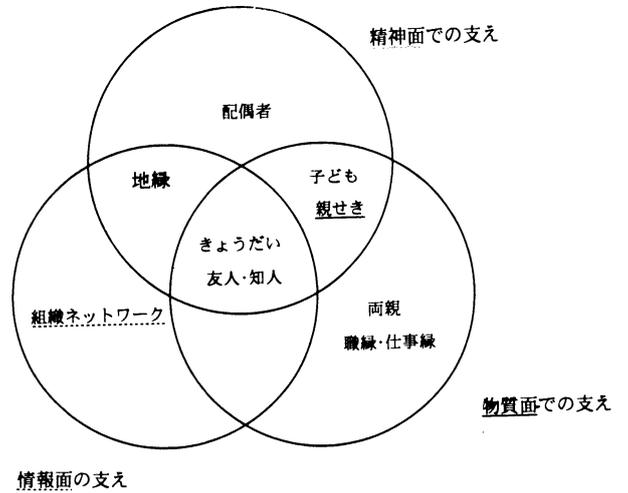
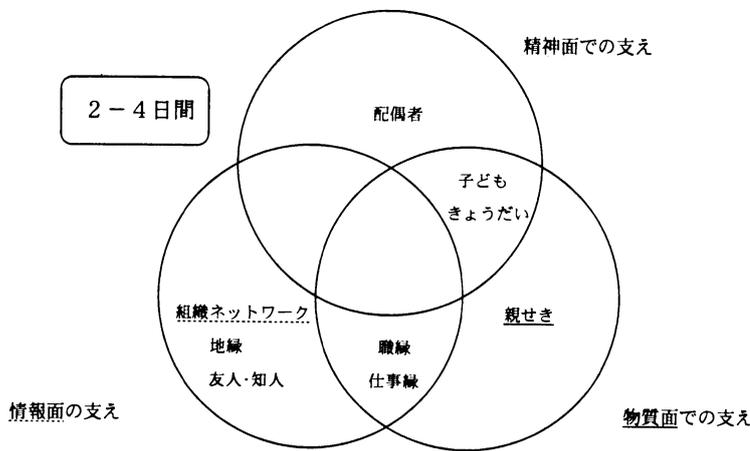
ひょうご便り読者は、震災後2-4日間では、様々な側面において、様々な縁を利用して、精神面・物質面・情報面のすべての側面において、きょうだい、友人・知人に支えられていることや、情報面に加え、精神面でも地縁に支えられていることが、県内在住者との大きな違いであった。

震災後2ヶ月以降になると、県内在住者と同じく、子どもがすべての側面で大きな支えとなるとともに、きょうだい、友人・知人もひき続きすべての側面で大きな支えとなっていた。また、県内在住者と違い、親せきを、物質面だけではなく、精神面での頼りにもしているのが特徴的であった。

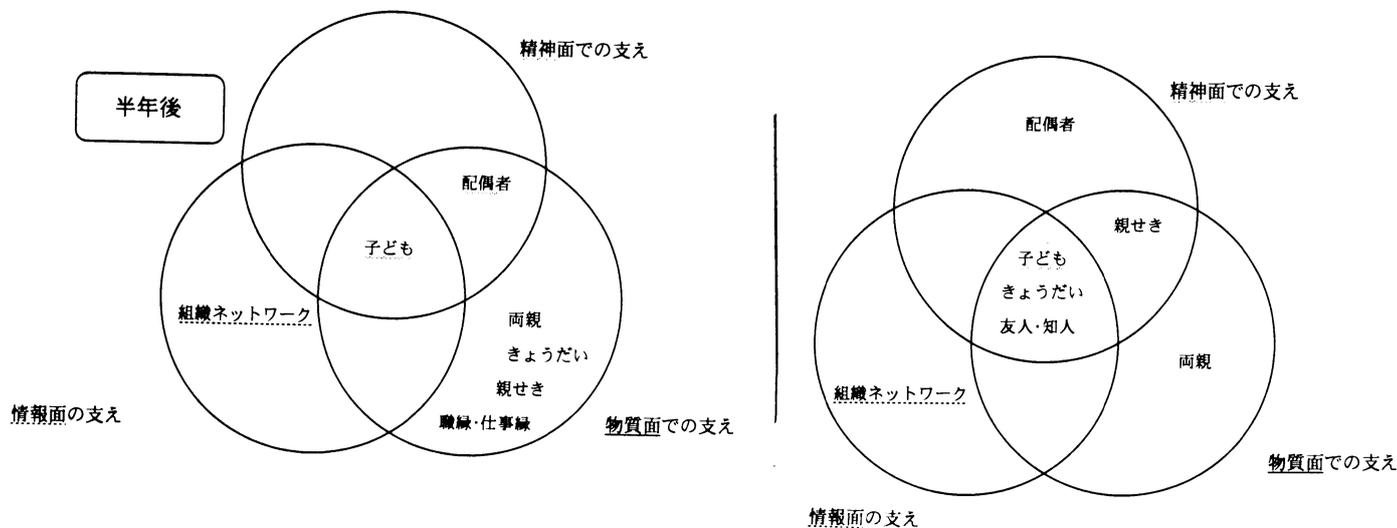
支援者図

県内在住者 (n=623)

ひょうご便り読者 (n=292)



各側面での下線は、
 平均値 (両親(A)～組織ネットワーク(J)の10の支援者の平均値)
 の2倍以上の値のあった支援者



図の見方：各時点、各側面で最も支えてくれたと思う人（複数いる場合は、複数回答可）を聞き、支援者ごとの全体（県内在住者〔n=623〕、ひょうご便り読者〔n=292〕）における割合を導きだした。そして、両親(A)、子ども(B)、きょうだい(C)、親せき(D)、配偶者(E)、地縁(F)、職縁・仕事縁(G)、学縁・関心縁(H)、友人・知人(I)、組織が提供するネットワーク(J)の10の支援者におけるの平均値を算出した（平均値は、③時間区分による支援の実態の表を参照）。円グラフに描かれている支援者は、その平均値を超えたものである。また、平均値の2倍を超えたものについては、下線を引いた。

② どの時点でどのようなネットワークが活用されたのか

精神面、物質面、情報面のそれぞれにおいて、どの時点でどの支援者が最も支えてくれたのか（どの時点でどのような縁を最も活用したのか）について、県内在住者、ひょうご便り読者の別にみていく。

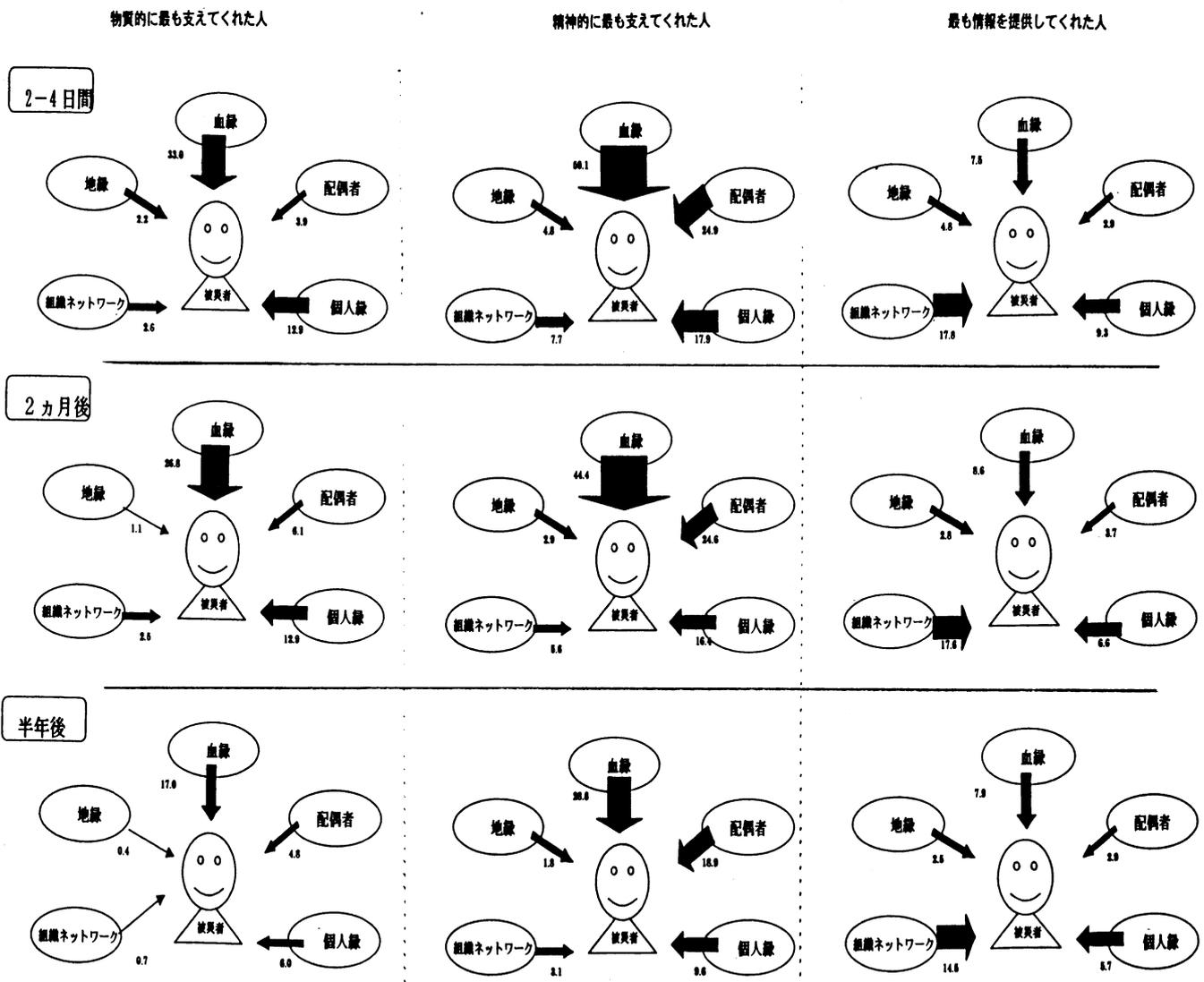
精神面においては、県内在住者、ひょうご便り読者とも血縁(両親、子ども、きょうだい、親せき)が最も利用された。しかし血縁も、震災後2-4日間、震災後2ヶ月までの割合は大きいものの、震災後半年になるとその割合は大きく減少した（県内：44.4%→28.8%、便り：83.3%→63.5%）。その他の縁については、県内在住者においては、配偶者が2割前後、個人縁（職縁・仕事縁、学縁・関心縁、友人・知人）が1割～2割弱ほど利用されていた。ひょうご便り読者においては、震災後2-4日間の地縁（14.2%）が特徴的であった。更に、他の支援者と違い、個人縁は、時間が経過するに従って利用する人の割合が増えていたのも特徴的であった。

物質面においては、県内在住者とひょうご便り読者には大きな違いがあった。県内在住者は、震災後2-4日間～震災後2ヶ月において、血縁が3割程度、個人縁が1割強利用されていた。しかしそれ以外はいずれも低率であった。県内在住者の建物被害、家財被害が小さいことを考えると、県内在住者が物質面での援助をそれほど必要としていないことが考えられる。一方で、ひょうご便り読者は、震災後2-4日間～震災後2ヶ月において、血縁が5割強～6割程度利用され、個人縁も2割程度利用されていた。その他の縁についても、いずれも県内在住者より高い率をあらわしていることがわかった。

情報面においても、県内在住者とひょうご便り読者には大きな違いがあった。県内在住者は組織ネットワークを中心に活用されていた。血縁は時間経過と関わりなく 8%前後の人々が活用し、個人縁ははじめは 10%、時間経過において 5%前後が活用していた。一方で、ひょうご便り読者は、組織ネットワークよりも、血縁に支えられている人が多かった。また、個人縁・地縁も時間経過にかかわらず活用されていた。ひょうご便り読者は、さまざまな縁を活用しながら情報収集を行っていたことがうかがえる。

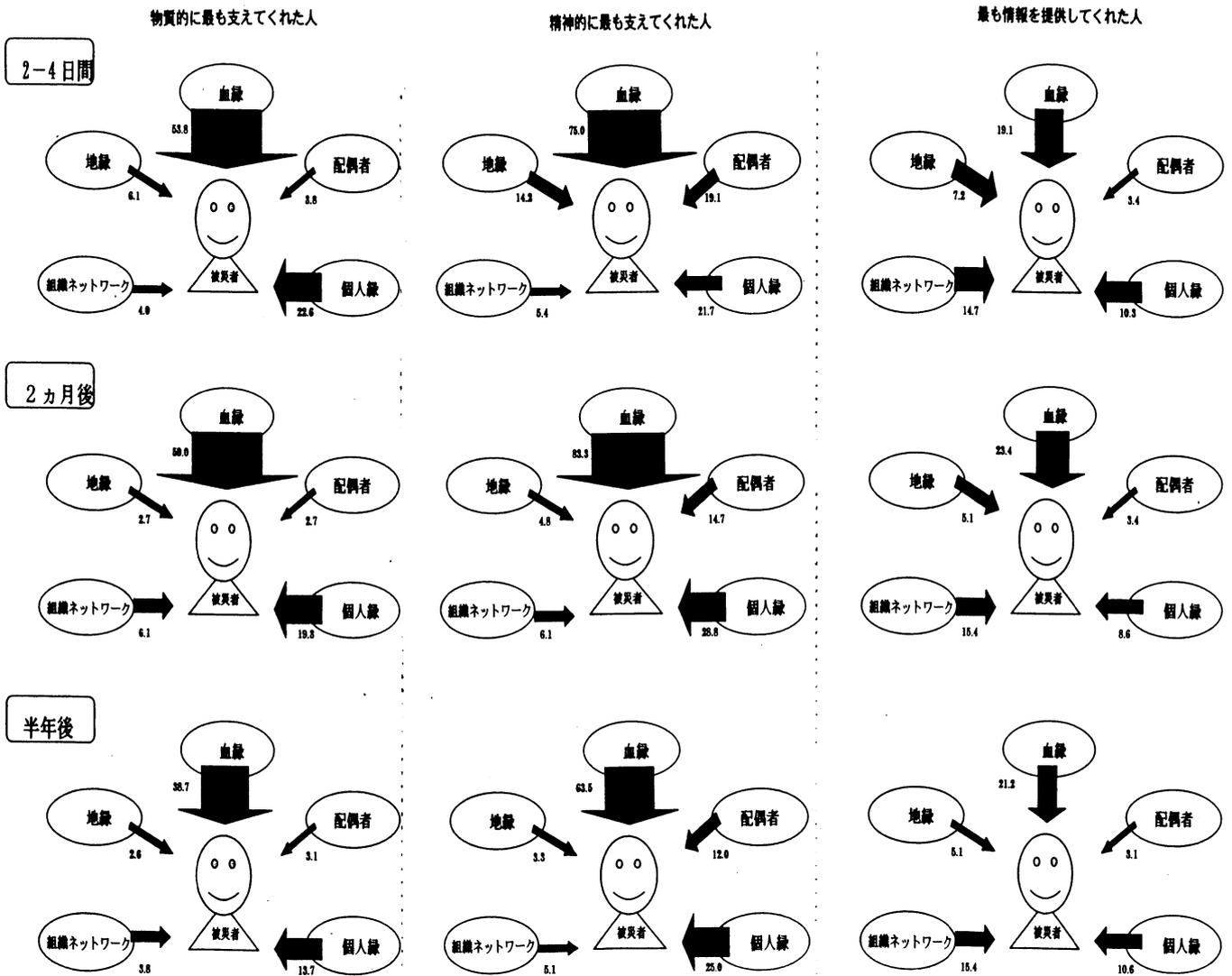
県内在住者

○ 援助を受けた相手（5縁でみた） 県内在住者(n=623)



ひょうご便り読者

○ 援助を受けた相手 (5 縁でみた) ひょうご便り読者 (n=292)



③ 時間区分による支援の実態

各時点（震災当日、震災後2-4日間、震災後2ヶ月、震災後半年）、各側面（震災当日：最も助けになった人、以降：精神面、物質面、情報面で助けになった人）において、県内在住者、ひょうご便り読者が、どのような人々に支えられていたのかを調べた。各時点、各側面で最も支えてくれたと思う人（複数いる場合は、複数回答可）を聞き、支援者ごとの割合を導きだした。そして、両親(A)、子ども(B)、きょうだい(C)、親せき(D)、配偶者(E)、地縁(F)、職縁・仕事縁(G)、学縁・関心縁(H)、友人・知人(I)、組織が提供するネットワーク(J)の10の支援者におけるの平均値を算出した。

以下に、県内在住者、ひょうご便り読者のそれぞれの平均値を述べながら、特に平均値を超えた支援者について、その特徴を見ていった。

震災当日におけるの平均値は、県内在住者3.8%、ひょうご便り読者9.4%で、ひょうご便り読者の方が、多くの支援を受けていることがわかった。項目別にみていくと、平均値を超えたのは、県内在住者では、子ども(7.5%)、配偶者(6.6%)、地縁(5.2%)、きょうだい(4.1%)、親せき(4.0%)であった。一方、ひょうご便り読者は、ひょうご便り読者全体(n=292)の2割以上の人々が地縁に助けられていることがわかった。以下、子ども(15.1%)、きょうだい(11.3%)、友人・知人(9.6%)と続いた。

震災後2-4日間におけるの平均値は、精神面（県内：10.5%、便り：13.5%）、物質面（県内：5.5%、便り9.0%）、情報面（県内：4.2%、便り：5.5%）と、いずれの側面においてもひょうご便り読者の方が、高い割合で支援を受けていた。平均値を超えた項目についてみると、精神面では、県内在住者、ひょうご便り読者ともに、配偶者、子ども、きょうだいに多く依存していた。また、ひょうご便り読者はそれに加えて、きょうだい、地縁、友人・知人にも支えられていた。物質面では、県内在住者、ひょうご便り読者とも、親せきから支援をうけている人々の割合が最も高かった。他に、子ども、きょうだい、職縁・仕事縁からも支援を受けていた。ひょうご便り読者はそれに加えて、親、友人・知人からも支えられていた。情報面では、組織ネットワークから支えられていた人が最も多かった。しかし、職縁・仕事縁や、友人・知人からも情報面で支えられていた。

震災後2ヶ月におけるの平均値は、精神面（県内：9.4%、便り：13.8%）、物質面（県内：4.5%、便り9.0%）、情報面（県内：3.9%、便り：5.6%）と、県内在住者は、各側面で支援を受けたと回答した人の割合が減少しているのに対し、ひょうご便り読者は、いずれの側面においても支援を受けたと回答した人の割合を増加させていた。ひょうご便り読者が、この時点においても、支援を必要としていたことがわかる。

平均値を超えた項目についてみると、精神面では、県内在住者、ひょうご便り読者ともに、子どもが大きな精神的支えになっていたことがうかがえる。その他には、県内では配偶者、ひょうご便り読者では、配偶者もさることながら、きょうだい、親せき、友人・知人も精神的支えとなっていた。物質面での支えは、震災後2-4日間と大きな変化はなかった。情報面では、組織ネットワークに支えられていた人が最も多いのは変わらないが、その他、子どもからも情報面で支えられていて、子どもがどのような側面においても、支援者となっていることがわかった。

震災後半年におけるの平均値は、精神面（県内：6.2%、便り：10.9%）、物質面（県内：2.9%、便り6.2%）、情報面（県内：3.4%、便り：5.5%）と、県内在住者、ひょうご便り読者ともに減少した。平均値を超えた項目についてみると、精神面、物質面、情報面ともに、震災後2ヶ月での項目とまったく同じであった。

支援者について（県内在住者）

調査対象者 623 人 複数回答可

単位は総数(n=623)における割合(%)

震災当日、もっとも助けになった人

		当日			
		全体	(内)	(外)	
個人的に作られたネットワーク	血縁	両親 A	2.4	1.3	1.1
		子ども B	7.5	6.4	1.1
		きょうだい C	4.1	2.7	1.4
		親せき D	4.0	1.8	2.2
	配偶者 E	6.6	6.4	0.2	
	地縁 F	5.2	5.2	-	
	個人縁	職縁・仕事縁 G	1.8	1.2	0.6
		学縁・関心縁 H	0.2	-	0.2
		友人・知人 I	2.8	2.2	0.6
	組織が提供するネットワーク J	3.6	(ボ) 0.6 (マ) 2.5 (公) 0.5		
その他 K	0.3	0.3	-		
助けは必要なかった L	1.3				
助けてくれる人がいなかった M	-				
平均値 N	3.8				

☆平均値：両親(A)～組織が提供するネットワーク(J)までの全 10 カテゴリーの平均値

☆内訳の省略語の説明は以下のとおり

(内)：被災地内にいた人 (外)：被災地外にいた人

(ボ)：ボランティア (マ)：マスコミ (公)：公共機関

☆複数の要素で成立するカテゴリーの詳細は以下のとおり

地縁：近所の人、町内会・婦人会、通りすがりの人

避難先の知り合い

職縁：勤め先・会社、職場の人

仕事縁：仕事の取引先

学縁：同学の友人

関心縁：宗教関係の団体、政治関係の団体

組織が提供するネットワーク

マスコミ：ラジオ、テレビ、新聞・公報

公共機関：消防、警察、自衛隊、行政

精神的に最も支えてくれた人

	2-4日間			2ヶ月			半年		
	全体	(内)	(外)	全体	(内)	(外)	全体	(内)	(外)
A	8.5	5.0	3.5	6.8	3.4	3.4	5.3	3.7	1.6
B	20.2	15.1	5.1	19.9	15.1	4.8	14.5	11.6	2.9
C	11.0	6.3	4.7	9.2	5.5	3.7	4.7	3.4	1.3
D	10.4	4.8	5.6	8.5	4.2	4.3	4.3	2.2	2.1
E	24.9	23.3	1.6	24.6	23.0	1.6	18.9	18.3	0.6
F	4.8	4.8	-	2.9	2.9	-	1.8	1.8	-
G	7.2	4.3	2.9	6.8	4.8	2.0	3.4	2.0	1.4
H	1.3	0.5	0.8	1.7	0.2	1.5	0.9	0.2	0.7
I	9.4	5.9	3.5	7.9	6.1	1.8	5.3	3.5	1.8
J	7.7	(ボ) 0.8 (マ) 5.7 (公) 1.2		5.6	(ボ) 0.5 (マ) 4.3 (公) 0.8		3.1	(ボ) 0.2 (マ) 2.7 (公) 0.2	
K	0.5	0.5	-	0.5	0.3	0.2	0.4	0.2	0.2
L	0.3			0.5			0.8		
M	0.2			-			0.3		
N	10.5			9.4			6.2		

物質的に最も支えてくれた人

	2-4日間			2ヶ月			半年		
	全体	(内)	(外)	全体	(内)	(外)	全体	(内)	(外)
A	5.3	1.8	3.5	6.4	3.2	3.2	4.3	2.2	2.1
B	7.6	5.0	2.6	7.2	5.3	1.9	5.5	3.7	1.8
C	8.5	2.9	5.6	6.8	3.4	3.4	3.0	1.9	1.1
D	11.6	3.7	7.9	6.4	2.1	4.3	4.2	1.8	2.4
E	3.9	3.4	0.5	6.1	5.1	1.0	4.8	4.3	0.5
F	2.2	2.0	0.2	1.1	1.1	-	0.4	0.4	-
G	6.5	3.2	3.3	7.3	3.6	3.7	3.2	2.0	1.2
H	1.3	0.3	1.0	1.2	0.2	1.0	0.7	0.2	0.5
I	5.1	2.1	3.0	4.4	2.2	2.2	2.1	1.6	0.5
J	2.6	(ボ) 1.4 (マ) 0.3 (公) 0.9		2.5	(ボ) 1.3 (マ) 0.5 (公) 0.7		0.7	(ボ) 0.3 (マ) 0.2 (公) 0.2	
K	0.8	0.5	0.3	0.5	0.3	0.2	0.7	0.2	0.5
L	0.5			0.8			2.1		
M	0.2			0.2			0.8		
N	5.5			4.9			2.9		

最も情報を提供してくれた人

	2-4日間			2ヶ月			半年		
	全体	(内)	(外)	全体	(内)	(外)	全体	(内)	(外)
A	0.8	0.3	0.5	1.4	0.8	0.6	1.5	1.0	0.5
B	2.6	1.8	0.8	4.4	3.4	1.0	4.3	3.7	0.6
C	2.7	1.4	1.3	1.6	1.0	0.6	1.3	0.8	0.5
D	1.4	0.6	0.8	1.2	0.6	0.6	0.8	0.6	0.2
E	2.9	2.6	0.3	3.7	3.2	0.5	2.9	2.6	0.3
F	4.8	4.8	-	2.8	2.8	-	2.5	2.5	-
G	4.5	3.4	1.1	3.5	2.8	0.7	3.2	2.5	0.7
H	0.6	0.3	0.3	0.2	-	0.2	-	-	-
I	4.2	3.2	1.0	2.9	2.1	0.8	2.5	2.1	0.4
J	17.8	(ボ) 0.3 (マ) 17.3 (公) 0.2		17.6	(ボ) 0.3 (マ) 16.8 (公) 0.5		14.5	(ボ) - (マ) 14.0 (公) 0.5	
K	0.2	0.2	-	-	-	-	0.4	0.2	0.2
L	-			0.2			0.3		
M	-			-			0.3		
N	4.2			3.9			3.4		

支援者について (ひょうご便り読者)

調査対象者 292 人 複数回答可

単位は総数(n=292)における割合(%)

震災当日、もっとも助けになった人

		当日			
		全体	(内)	(外)	
個人的に作られたネットワーク	血縁	両親 A	6.5	3.8	2.7
		子ども B	15.1	7.9	7.2
		きょうだい C	11.3	5.5	5.8
		親せき D	9.2	4.1	5.1
	配偶者 E	8.2	7.2	1.0	
	地縁 F	22.2	21.6	0.6	
	個人縁	職縁・仕事縁 G	7.9	4.2	3.7
		学縁・関心縁 H	1.7	-	1.7
		友人・知人 I	9.6	7.2	2.4
	組織が提供するネットワーク J	2.0	(ボ) 0.3	(マ) 1.0 (公) 0.7	
その他 K	1.7	0.7	1.0		
助けは必要なかった L	1.4				
助けてくれる人がいなかった M	0.3				
平均値 N	9.4				

☆平均値：両親(A)～組織が提供するネットワーク(J)までの全 10 カテゴリーの平均値

☆内訳の省略語の説明は以下のとおり

(内)：被災地内にいた人 (外)：被災地外にいた人

(ボ)：ボランティア (マ)：マスコミ (公)：公共機関

☆複数の要素で成立するカテゴリーの詳細は以下のとおり

地縁：近所の人、町内会・婦人会、通りすがりの人

避難先の知り合い

職縁：勤め先・会社、職場の人

仕事縁：仕事の取引先

学縁：同学の友人

関心縁：宗教関係の団体、政治関係の団体

組織が提供するネットワーク

マスコミ：ラジオ、テレビ、新聞・公報

公共機関：消防、警察、自衛隊、行政

精神的に最も支えてくれた人

	2-4日間			2ヶ月			半年		
	全体	(内)	(外)	全体	(内)	(外)	全体	(内)	(外)
A	12.7	4.8	7.9	12.7	4.5	8.2	9.3	3.1	6.2
B	24.3	12.0	12.3	29.8	9.9	19.9	25.7	6.2	19.5
C	19.2	8.2	11.0	22.3	7.9	14.4	16.8	5.5	11.3
D	18.8	6.8	12.0	18.5	5.5	13.0	11.7	3.1	8.6
E	19.1	16.4	2.7	14.7	8.2	6.5	12.0	5.8	6.2
F	14.2	13.3	0.9	4.8	2.8	2.0	3.3	2.7	0.6
G	5.9	3.5	2.4	8.2	2.4	5.8	6.5	1.7	4.8
H	1.7	-	1.7	3.8	0.7	3.1	3.8	1.0	2.8
I	14.1	8.2	5.9	16.8	8.6	8.2	14.7	6.8	7.9
J	5.4	(ボ) 1.7 (マ) 3.4 (公) 0.3		6.1	(ボ) 2.7 (マ) 2.0 (公) 1.4		5.1	(ボ) 1.0 (マ) 2.7 (公) 1.4	
K	1.3	0.3	1.0	0.3	-	0.3	0.3	-	0.3
L	0.7			0.3			0.7		
M	0.3			-			0.3		
N	13.5			13.8			10.9		

物質的に最も支えてくれた人

	2-4日間			2ヶ月			半年		
	全体	(内)	(外)	全体	(内)	(外)	全体	(内)	(外)
A	9.3	3.1	6.2	9.9	2.4	7.5	8.6	2.1	6.5
B	11.3	2.4	8.9	12.7	2.4	10.3	10.9	1.7	9.2
C	15.0	5.1	9.9	16.8	4.8	12.0	11.6	3.4	8.2
D	18.2	4.5	13.7	19.6	4.5	15.1	7.6	1.4	6.2
E	3.8	2.4	1.4	2.7	1.0	1.7	3.1	0.7	2.4
F	6.1	5.2	0.9	2.7	1.7	1.0	2.6	1.7	0.9
G	9.9	5.1	4.8	7.2	0.3	6.9	3.7	1.0	2.7
H	3.0	-	3.0	3.1	-	3.1	1.7	-	1.7
I	9.7	5.2	4.5	9.0	2.8	6.2	8.3	3.1	5.2
J	4.0	(ボ) 2.7 (マ) 0.3 (公) 1.0		6.1	(ボ) 2.4 (マ) 0.3 (公) 3.4		3.8	(ボ) 0.7 (マ) - (公) 3.1	
K	0.7	-	0.7	1.3	0.3	1.0	-	-	-
L	1.0			0.3			1.7		
M	0.3			-			1.0		
N	9.0			9.0			6.2		

最も情報を提供してくれた人

	2-4日間			2ヶ月			半年		
	全体	(内)	(外)	全体	(内)	(外)	全体	(内)	(外)
A	1.7	0.7	1.0	2.4	1.7	0.7	2.0	1.0	1.0
B	5.1	1.7	3.4	8.6	3.1	5.5	8.9	3.1	5.8
C	7.5	3.4	4.1	8.3	3.8	4.5	5.5	3.1	2.4
D	4.8	2.1	2.7	4.1	2.4	1.7	4.8	3.1	1.7
E	3.4	2.7	0.7	3.4	2.4	1.0	3.1	1.4	1.7
F	7.2	6.2	1.0	5.1	4.4	0.7	5.1	4.4	0.7
G	3.4	2.1	1.3	2.7	1.7	1.0	1.3	1.0	0.3
H	1.0	0.3	0.7	1.0	0.3	0.7	1.0	-	1.0
I	5.9	4.5	1.4	4.9	2.8	2.1	8.3	6.9	1.4
J	14.7	(ボ) 0.3 (マ) 14.1 (公) 0.3		15.4	(ボ) 1.0 (マ) 11.3 (公) 3.1		15.4	(ボ) 1.0 (マ) 11.3 (公) 3.1	
K	0.6	0.3	0.3	0.7	-	0.7	0.7	-	0.7
L	-			0.3			-		
M	0.3			0.3			0.7		
N	5.5			5.6			5.5		

4. 被災後の家族関係の変化と、現在のストレスや生活の復興に 与える影響

①家族関係の全般的な変化

被災後の家族関係の変化について調べるために、本調査では家族システム評価尺度 (FACES KGI V-16) (問 9、問 12、問 15 で使われていた尺度) を利用し、震災から 2~4 日後、2 ヶ月後、半年後における家族関係のあり様をたずねた。家族システム評価尺度は、家族システム円環モデルに基づいている。家族関係の機能度を「きずな」と「かじとり」という二つの側面から調べるモデルである。きずなとは、家族成員間の心理的・社会的な距離を指す。一方かじとりとは、家族内のリーダーシップや役割関係、決まりなどを状況の変化に応じて変化させる柔軟性を意味している。円環モデルによれば、通常の世界生活では「きずな」・「かじとり」とともに中庸でバランスが取れた場合に、家族関係の機能度が最も高まると想定する。逆に、いずれの側面でも、「極めて低すぎる」か、あるいは逆に「極めて高すぎる」場合には、家族成員を支える力が弱まると考える。一方、危機的な状況下では、家族は困難な事態を乗り切るために一時的に極端に近い形態を取ることも、併せて知られている。

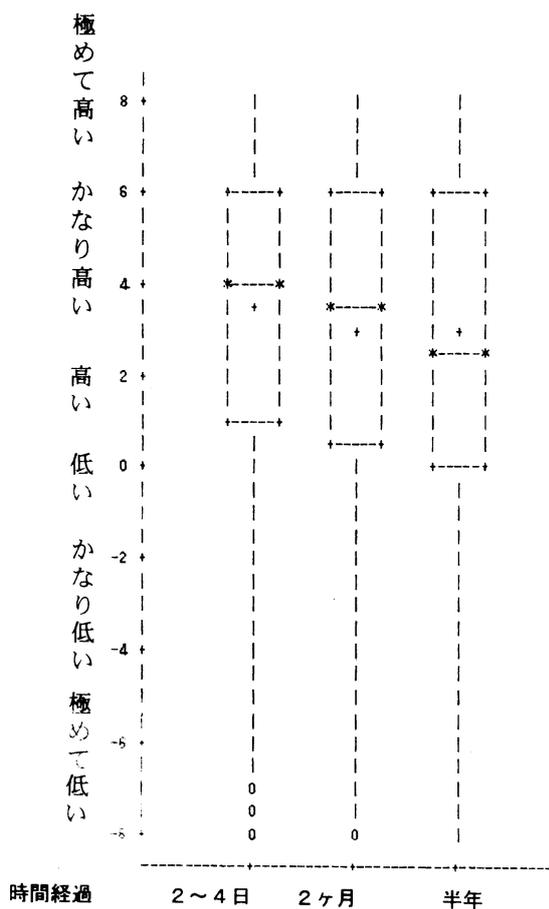


図4-1: きずなの変化

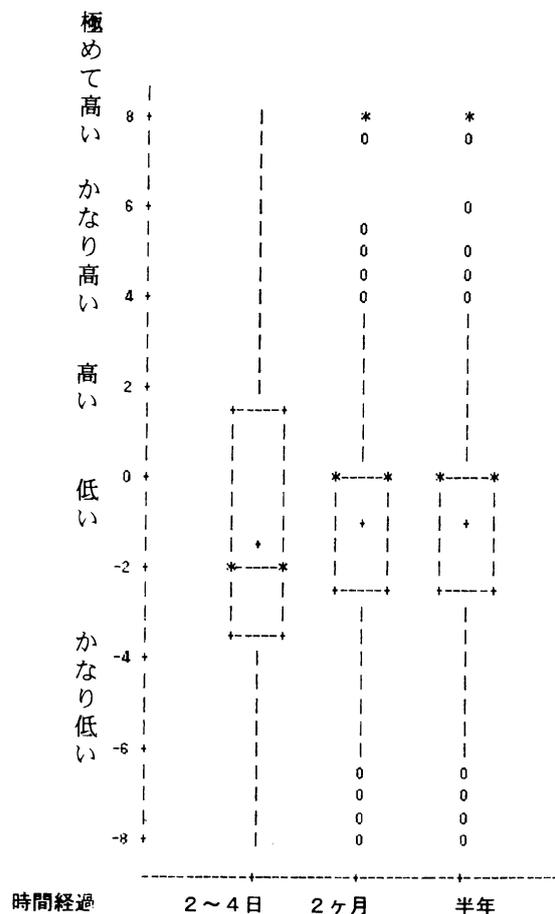


図4-2: かじとりの変化

図1および図2の箱ヒゲ図は、縦軸にそれぞれ家族のきずな（図1）とかじとり（図4）の得点を示し、横軸には震災後の時間の節目を示している。つまり両図は、きずな・かじとりが、震災後2～4日（100時間）から、2ヶ月（1,000時間）、そして半年後の時点へとどのように変化したかについて、全体の回答者の傾向を示すものである。

箱ヒゲ図は、分布の位置について要約的な情報を与える手段である。図は、箱の部分とヒゲの部分から成り立っているが、箱の底辺は分布の25パーセント目にあたる値を、箱の上辺は分布の75パーセント目の値を示している。一方、箱の中間に引かれた線（二つの*印の間に引かれた線）は分布の50パーセント目の値（中央値）を示している。次に、箱の上辺（75パーセント目の値）から底辺（25パーセント目の値）までの距離を中央散布度 h と呼び、箱の上下両方から $1.5h$ 分以内の距離にある観測値は分布の一部と見なすのが経験則となっている。なお、箱中にある+印は分布の平均値の位置を示している。

箱ヒゲ図の分析からは、家族関係について震災直後（2～4日目）における家族関係が、2ヶ月、そして半年と時間が経つにつれて日常的な家族関係に戻っていった様が観察された。家族のきずなについて中央値の変化を追うと、震災直後には全体の半数以上の家族ではきずなが「かなり高い」状態であったことがわかる。しかし2ヶ月、半年と時間が経過するにつれてきずなは全体として下がる傾向にあったことがわかる。すなわち、震災直後には被災者家族は、家族間の成員の物理的・心理的距離を縮めて緊密化・一体化する傾向を高め、きずなは「かなり高い」状態であったが、2ヶ月目にはその傾向はやや低下し、さらに半年後には中央値で1ポイント分低減した。これは半年後には、成員個々の自立性や個別性への配慮が戻り、家族への一体感と同時に成員個々の個別性の尊重にもバランスよい配慮が重視されるようになったことを物語るものである。

成員間のリーダーシップや役割関係の柔軟さを示す家族のかじとりについては、震災直後の2～4日後には、中央値がマイナスであり、かじとりが「低い」と判定される領域にあった。この時点では、家族リーダー主導型の明快なリーダーシップ構造が重視されたことがわかる。中央値の変化で見ると、2～4日目の-2ポイントから、2ヶ月目、半年目になると中央値は0の位置にまで、2ポイントも柔軟性が回復していた。これは、2ヶ月日以降になると、確固としてリーダーシップ構造から、成員個々の意志を尊重するより民主的なリーダーシップスタイルに家族関係が戻ったことを物語っている。

②震災から2～4日、2ヶ月、半年後の家族のきずなと現在のストレス度・生活復興度の関係

今回の調査では、問35から現在のところとからだに現れたストレス症状をたずねている。この回答を得点化して現在のストレス度を求め、震災後の各時点における家族のきずなの水準と回答者の現在のストレス状態について関連性を検討した。その結果が以下の図3、図4、図5である。それぞれ2～4日後、2ヶ

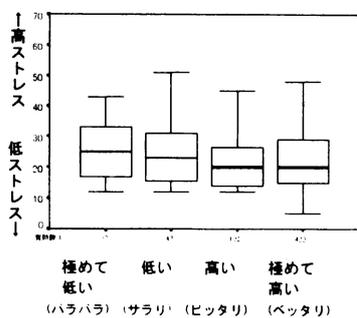


図3 : 震災から2~4日後の家族のきずなと現在のストレス度

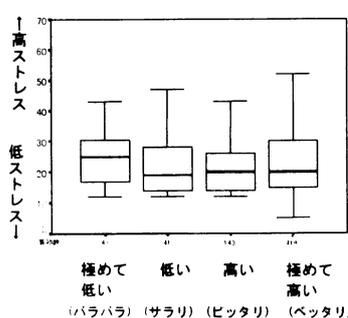


図4 : 震災から2ヶ月後の家族のきずなと現在のストレス度

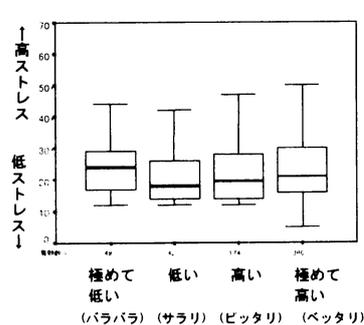


図5 : 震災から半年後の家族のきずなと現在のストレス度

月後、半年後における家族のきずなの水準と現時点における回答者のストレス度との関係を調べたものである。それぞれの図の横軸はきずなの水準を表し、左から右に家族のきずなが極めて低い(バラバラ)、中庸ではあるがやや低め(サラリ)、中庸ではあるがやや高め(ピッタリ)、そして極めて高い(ベッタリ)の順になっている。縦軸は、どの図も現在のストレス症状の得点を示し、高得点ほど高ストレス状態であることを意味している。

震災から2~4日後(図3)を見ると、きずなの水準が高ければ高いほど、現在のストレス得点が低い傾向にあることがわかる。震災直後には、家族成員間の緊密さを高めることのできた家族ほど、うまく家族成員のストレスを対処できたことを物語るものである。これに対して2ヶ月後(図4)では、きずなが極端に低いバラバラ状態(左端の箱ヒゲ)ではストレス症状得点が同様に高い。しかしサラリから上の水準では、きずなが高まれば高まるほどストレス得点が下がる傾向は弱まっている。そして半年後のきずなと現在のストレス症状の関係(図5)を見ると、きずなが極端に低い場合には現在のストレス症状が高いが(図左端)、同時にきずなが極端に高い場合でもストレス症状が高まる(図右端)傾向が現れる。つまり、家族のきずなは極端に低すぎても、あるいは逆に極端に高すぎても成員のストレス症状を和らげる力が弱まるという家族システム円環モデルの仮説どおりの結果が得られた。

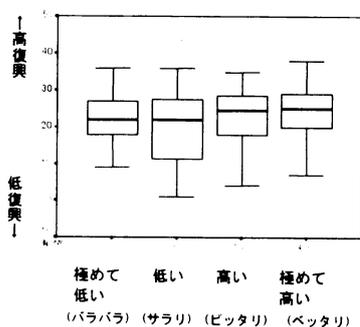


図6 : 震災から2~4日後の家族のきずなと現在の生活復興度

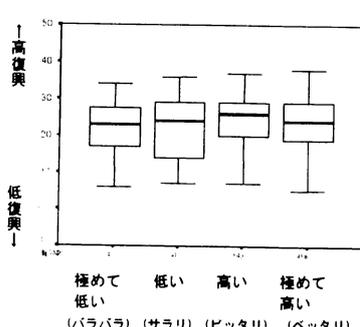


図7 : 震災から2ヶ月後の家族のきずなと現在の生活復興度

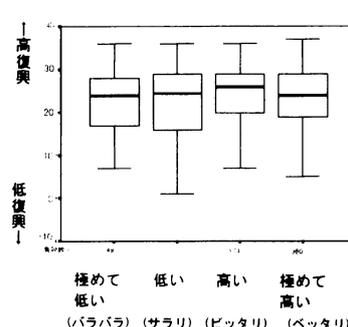


図8 : 半年後の家族のきずなと現在の生活復興度

ストレス症状と合わせて今回の調査では、生活の復興状態（問 36）や現在の生活満足度（問 37）をたずねている。これら 2 問の回答を合算して現在の生活復興度を得点化し、震災後各時点での家族のきずなどの関連性について検討した。その結果が図 6、図 7、図 8 である。これらの各図では、現在の生活復興度得点を縦軸に取り、横軸はそれぞれ 2～4 日後、2 ヶ月後、半年後の家族のきずな水準を示したものである。震災直後の 2～4 日後（図 6）では、家族のきずな高まれば高まる程直線的に現在の生活復興度が高いという傾向が見て取れる。しかし、すでに 2 ヶ月後（図 7）では、きずなが極端に高いベッタリ状態（右端）では、生活復興度が低下することが示されている。同様のことは、震災から半年後（図 8）にも認められる。

震災直後の危機的な状況では、家族は出来る限りきずなを高めることによって緊急事態の対処を行った。しかし震災から半年後では、通常の家関係に復帰した家族の方が成員を支える力が高かった。つまり、きずなが中庸であればあるほど成員のストレスを緩和し、生活復興度を高めていたのである。

③震災から 2～4 日、2 ヶ月、半年後の家族のかじとりと現在のストレス度・生活復興度の関係

震災後の各時点における家族のかじとりの水準と回答者の現在のストレス状態について調べたのが以下の図 9、図 10、図 11 である。それぞれ 2～4 日後、2 ヶ月後、半年後における家族のかじとりの水準と現時点における回答者のストレス症状との関係を調べたものである。それぞれの図の横軸はかじとりの水準を表し、左から右に家族のかじとりが極めて低い（融通なし）、中庸ではあるがやや低め（キッチリ）、中庸ではあるがやや高め（柔軟）、そして極めて高い（てんやわんや）の順に並べている。縦軸は、どの図も現在のストレス得点を示している。

震災から 2～4 日後（図 9）を見ると、かじとりの水準が低いほど、現在のストレス症状得点が低い傾向にあることがわかる。震災直後には、明快なリーダーシップを発揮して問題に対処することのできた家族ほど、うまく家族成員のストレスを緩和できたことを物語るものである。これに対して 2 ヶ月後（図 10）では、かじとりが極端に低い融通なし状態（左端の箱ヒゲ）はストレス症状得

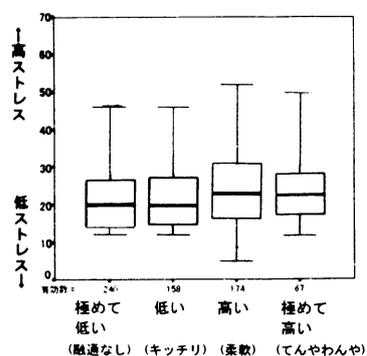


図 9 :
震災から 2～4 日後の家族のかじとりと現在のストレス度

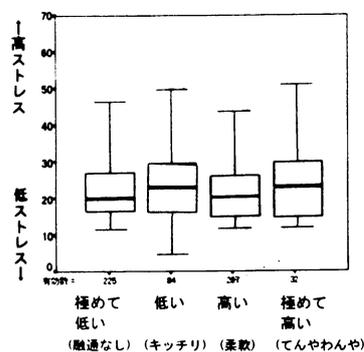


図 10 :
震災から 2 ヶ月後の家族のかじとりと現在のストレス度

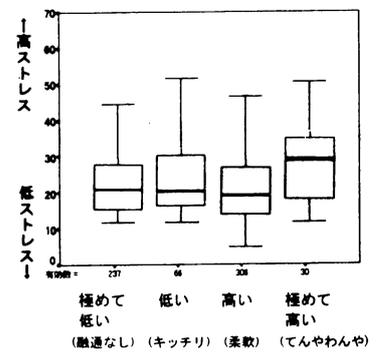


図 11 :
震災後半年の家族のかじとりと現在のストレス度

点が低い一方で、「キッチリ」・「柔軟」・「てんやわんや」の3水準では、かじとりが「柔軟」な場合にストレス水準が最も低く、その両側ではストレスが高まる傾向が現れる。そして半年後のかじとりと現在のストレス症状の関係(図11)を見ると、かじとりが中庸で「柔軟」な場合に、ストレス水準が最も低く、一方中庸から左右いずれかの方向に離れると現在のストレス症状が高まる傾向が認められた。

緊急時には融通がなくても明快なリーダーシップ構造が発揮できた家族では困難な事態に対処でき、一方日常に復帰すれば中庸なかじとりが適応的であるという関係は、家族のかじとりと成員の現在の生活復興度との関連性により明瞭に認められた。図12、図13、図14は、現在の生活復興度を縦軸に取り、横軸はそれぞれ2~4日後、2ヶ月後、半年後の家族のかじとり水準を示したものである。震災直後の2~4日後(図12)では、家族のかじとり高まれば高まる程直線的に現在の生活復興度が高いという傾向が見て取れる。しかし、すでに2ヶ月後(図13)では、かじとりが極端に高いベッタリ状態(右端)では、生活復興度が低下することが示されている。同様のことは、震災から半年後(図14)にも認められる。つまり、家族のかじとりは極端に低すぎても、あるいは逆に極端に高すぎても家族機能度が下がるという家族システム円環モデルの仮説どおりの結果が得られた。

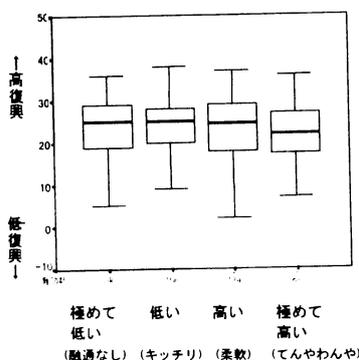


図4-12: 震災から2~4日後の家族のかじとりと現在の生活復興度

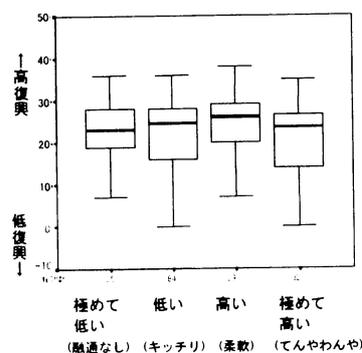


図13: 震災から2ヶ月後の家族のかじとりと現在の生活復興度

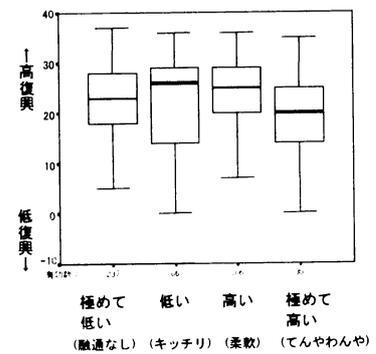


図14: 震災後半年の家族のかじとりと現在の生活復興度

震災直後の危機的な状況では、家族は出来る限りかじとりを低めることによって緊急事態の対処を行った。しかし震災から半年後では、通常の家関係に復帰した家族の方が成員を支える力が高かった。つまり、かじとりが中庸であればあるほど成員のストレスを緩和し、生活復興度を高めていたのである。

④まとめ

震災から2~4日後では、家族成員間の心理的距離が高く(きずな高)、家長主導型の融通ない厳格なリーダーシップ構造(かじとり低)であった家族は、現在のストレス度が低く、逆に生活復興度が高い傾向にある。

一方、震災から半年が経過した時点では、きずなが依然として高水準を維持する場合には、むしろストレス度が高く、かじとりも家長による厳格なリーダーシップ構造が維持された場合には、現在の高ストレス・低適応と関連することが明らかになった。

震災から半年が経過した時点で、家族関係の緊急対応的な措置は終了した。そして平時の家族関係が回復している家族ほど、家族成員のストレスを和らげ、生活復興を促進する力を与えていたことが明らかになった。

5. 仕事の変遷

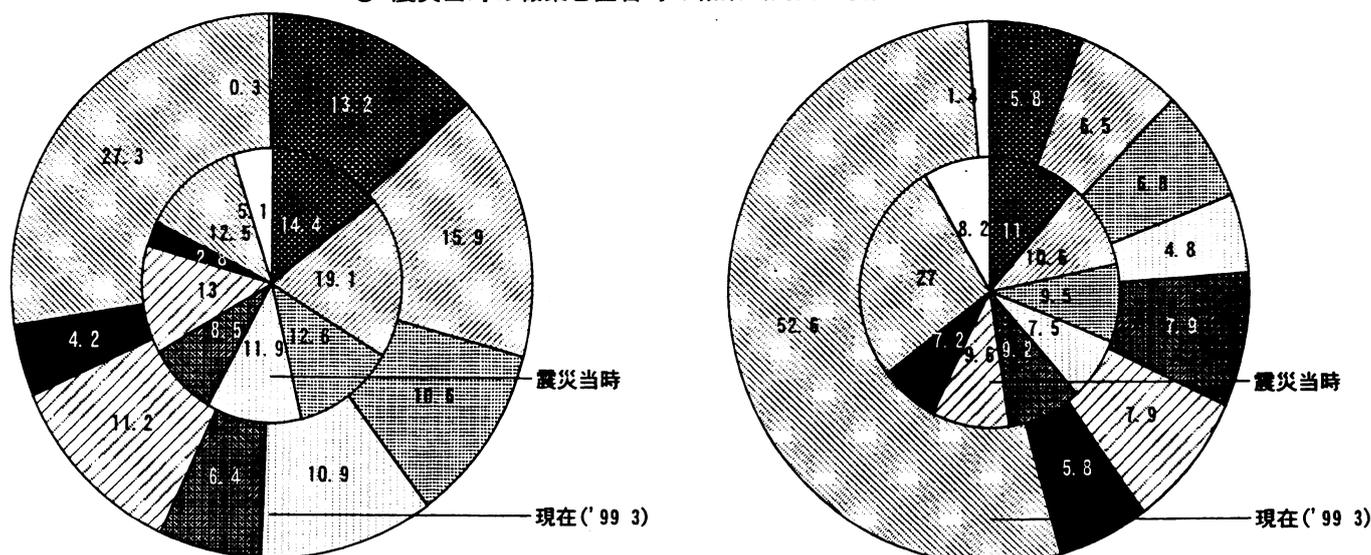
① 職業分布

阪神・淡路大震災において、職業・生業における被害は甚大である。また転職や廃業を余儀なくされた被災者も多い。ここでは、県内在住者(n=623)とひょうご便り読者(n=292)の就業状況の変化を見てみる。ちなみに、回答者はすべて世帯主である。

県内在住者における震災当時('95 1/17)と回答時('99 3月現在)の職業分布をみると、すべての職業分野において、その比率がほぼ同じ比率で小さくなり、そのかわり「無職・年金生活者・その他」の比率が12.5%から27.3%に増加し、また「主婦」も2.8%から4.2%に増加している。つまり、他の職業の減少分がこの2層、年金やその他、自分の生業以外からの収入しかない層に移行したことがわかる。また、職業の種類に偏らず、比率の現象が起こっている。

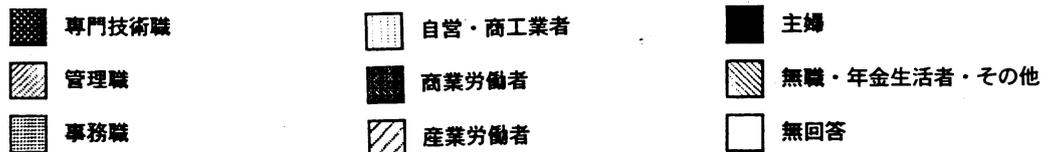
ひょうご便り読者においては、高年齢層の割合が大きかったせいで、「無職・年金生活者・その他」の比率が27.0%（震災当時）ともともと高かったのだが、回答時では52.6%と過半数を超えるほど、増加している。それに比例して、他のすべての層で減少が見られる。

○ 震災当時の職業と回答時の職業（内円：震災当時、外円：回答時）



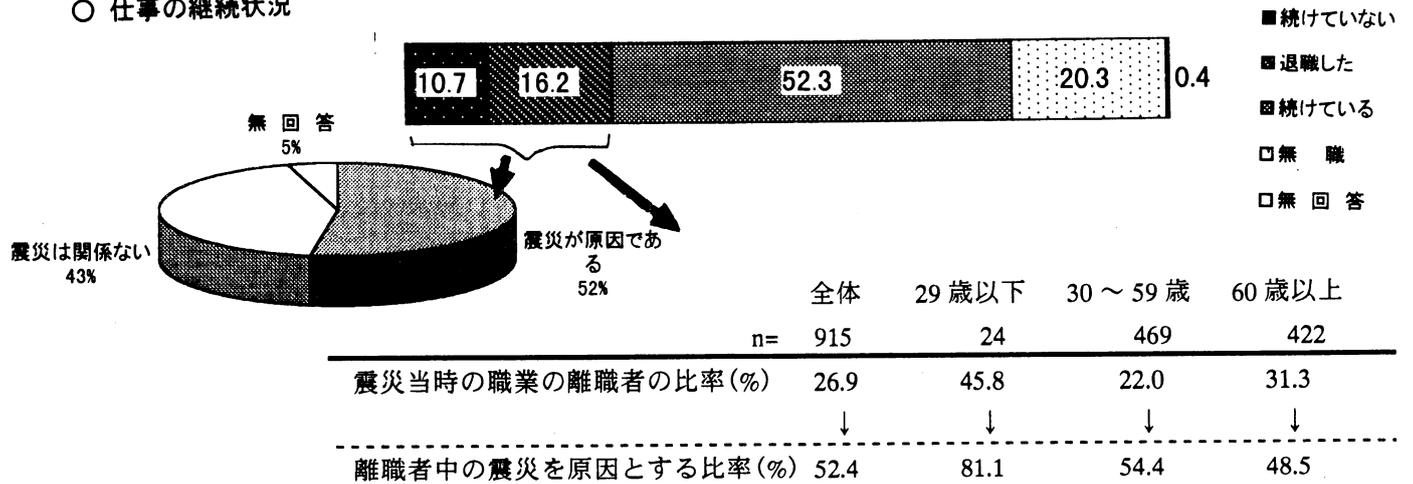
県内在住者 (n=623)

ひょうご便り読者 (n=292)



全体(n=915)では、震災当時の仕事を「続けていない」人は10.7%、「退職した」人は16.2%で、合わせて26.9%の人が変動している。その人達(n=246)で、震災が原因であると回答した人は52.4%である。したがって、回答者中、震災が原因で退職・転職した人は14.1%になる。注目すべきは、回答者のうち「29歳以下」の若い年齢層では、退職・転職者が45.8%、そのうち震災が原因である人は81.1%という高い比率に上っていることである。つまり、仕事における震災の被害は、高年齢層のリタイアを早め、若年労働者の失業という形で端的に現れたのである。

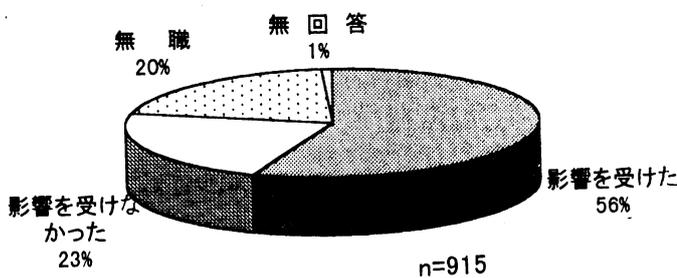
○ 仕事の継続状況



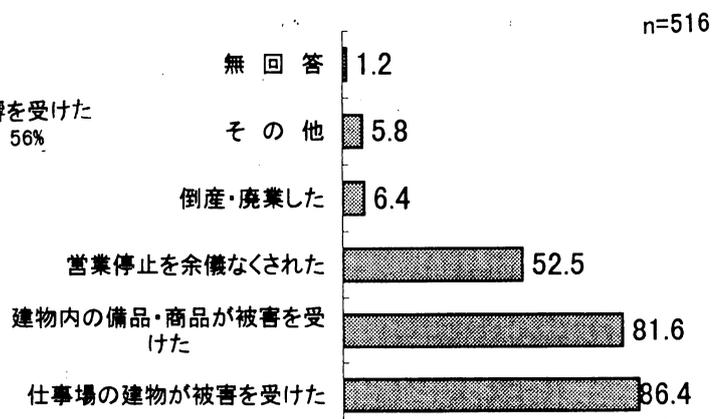
② 仕事場・勤務先の被害

回答者全体(n=915)で仕事場・勤務先が震災で影響を受けた人は56.4%である。影響を受けたと答えた人(n=516)に、その具体的内容を尋ねたところ、「仕事場の建物被害」(86.4%)や「備品・商品の被害」(81.6%)が多いが、「営業停止を余儀なくされた」も過半数(52.5%)に上っている。また「倒産・廃業した」と答えた人も6.4%いる。また、被害総額について、「100万円～1000万円」(25.9%)が最も多いが、「1億円以上」も11.3%いる。年収に対する被害額の比率では、「30%未満」が40.8%、「30%～100%」が12.8%、「100%以上」が11.3%である(不明・未回答が36.2%)。

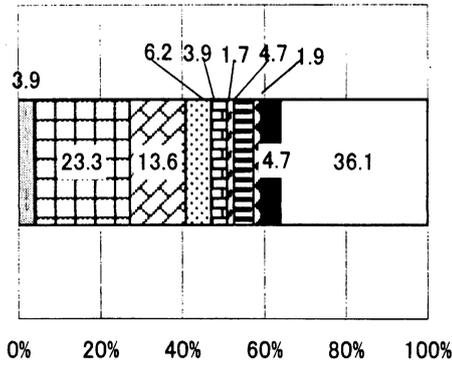
○ 仕事に関する震災の影響



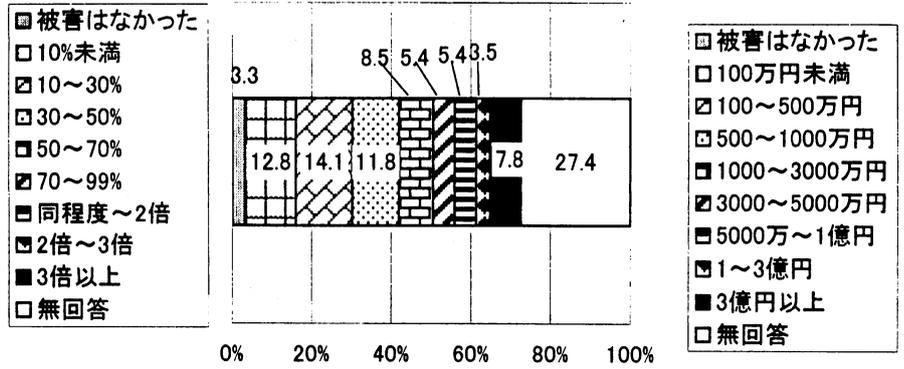
○ 被害の内容



○ 年収に対する被害割合 n=516



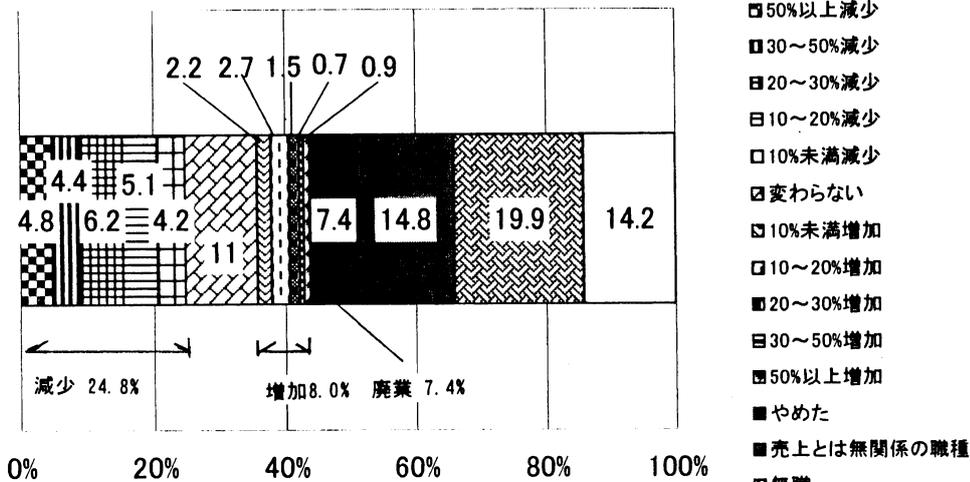
○ 年収に対する被害総額 n=516



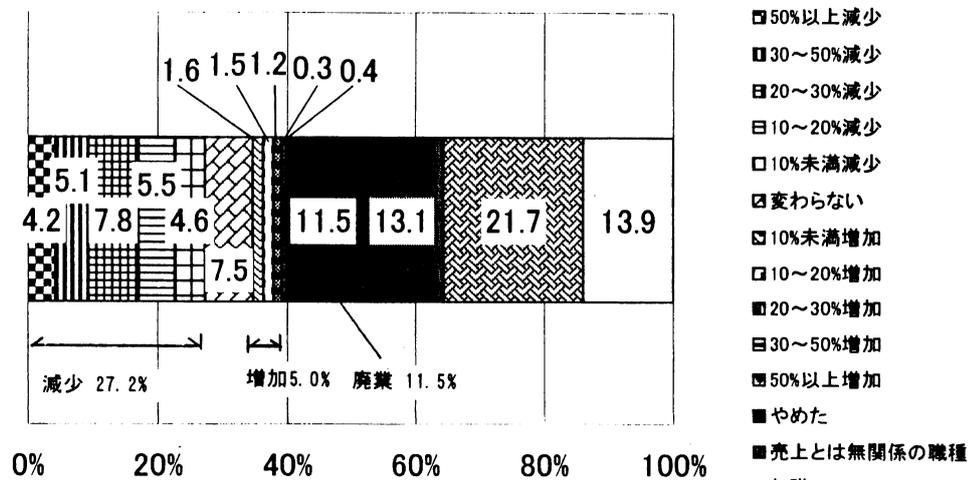
③ (震災1年後、調査時点の売り上げ増減

回答者全員 (n=915) に震災翌年度末及び調査時点の仕事場・勤務先の売り上げ状況を尋ねた。その結果、翌年度の売り上げが「減少した」のは24.8%、増加が8.0%、やめた(廃業)が7.4%という数値であった。さらに、調査時点(99年3月)の状況で減少27.2%、増加5.0%、廃業11.5%となり、震災に加えて構造不況にあえぐ被災地の姿が浮き彫りとなった。

○ 震災翌年度末の売上状況 n=915



○ 調査時点(99年3月)の売上状況 n=915



6. 市民性は自律と連帯－市民意識の基本軸－

①市民意識の基本軸

市民意識を決定する基本軸をさぐるために、社会生活に関する回答者の態度や信条について20問の質問を行った。各設問では、社会生活において「連帯や協調」を重視するか、それとも「非連帯・自分本位」を重視するか、あるいは行動の基準として「内発的行動基準（自律）」を重視するか、それとも「他者による行動の評価」を重視するのかのいずれかの選択を求めた。これら二つの判断基準の軸は、今回の調査のために討議を進めるなかで理論的に練り上げた仮説的概念である。

回答者は、震災前の態度と現在の態度と二通りの回答を行ったが、これら震災前および現在の市民意識に関する回答に存在する回答パターンを明らかにするためにコレスポネンス分析を実施した。その結果、市民意識を決定する軸として、「連帯・協調」対「非連帯」軸と、「内発的行動基準重視（自律）」対「他者評価重視」軸の二軸によって回答が分類されることが実証された（図1：市民意識のコレスポネンス分析結果参照）。

すなわち市民意識をさぐる上で、「自律」を重視するか否かの対立軸と、「連帯」を重視するか否かの対立軸という二つの軸は、理論的面および実証データ面からもその妥当性が支持される結果となった。これらの二つの軸を用いると、市民意識に関する回答項目は、「わがまま」、「ホンネ主義」、「秩序・タテマエへの同調」、「市民性」という四つのグループに分類されることが判った。以下、各回答群について簡単に説明する。

第一は「わがまま」回答群である。これは、行動の基準を「他者評価」に求め、かつ「自分本位」を重視する態度であり、コレスポネンス分析結果の右上の象限に布置した。具体的な項目としては、「他人の権利よりは自分の権利が大事」、「まずいことは他人のせいにする」、「講演会でおしゃべりをするがある」、「自分がえこひいきされるのはかまわない」などの項目が含まれている。

第二は「ホンネ主義」回答群である。これは、「内発的行動基準」に基づいて自律的にふるまうが、その際に「非連帯・自分本位」を重視するという態度であり、コレスポネンス分析では右下の象限に布置した。具体的な項目としては、「約束はうやむやにすることがある」、「決まったことでも不便なことは守らない」、「実情に則さない法律は守らなくてよい」、「苦労はなるだけ避ける」などの回答によって特徴づけられる。

（※5：コレスポネンス分析）

第三は「秩序・タテマエへの同調」回答群である。これは、ちょうど「ホンネ主義」と対照的な態度であり、行動基準は「他者評価」であり、その他者と

の「連帯・協調」を重視する。コレスポネンス分析の結果でも、「ホンネ主義」（右下象限）とは対極的な位置（左上の象限）に布置した。具体的な項目としては、「方便でもうそはいやだ」、「自分で決めたことは最後まで守る」、「そこで決まったことは不服でも守る」といった秩序追従型の回答によって特徴づけられる。

第四が「市民性」回答群である。これは、「内発的行動基準（自律）」に基づく「連帯・協調」によって特徴づけられる。すなわち、市民性は「自律と連帯」という二つの特質を兼ね備えるものであることが明らかになった。ここで言う市民性とは英語の civic-mindedness に相当する概念であり、具体的には自律および連帯に関する以下のような項目から測定される。

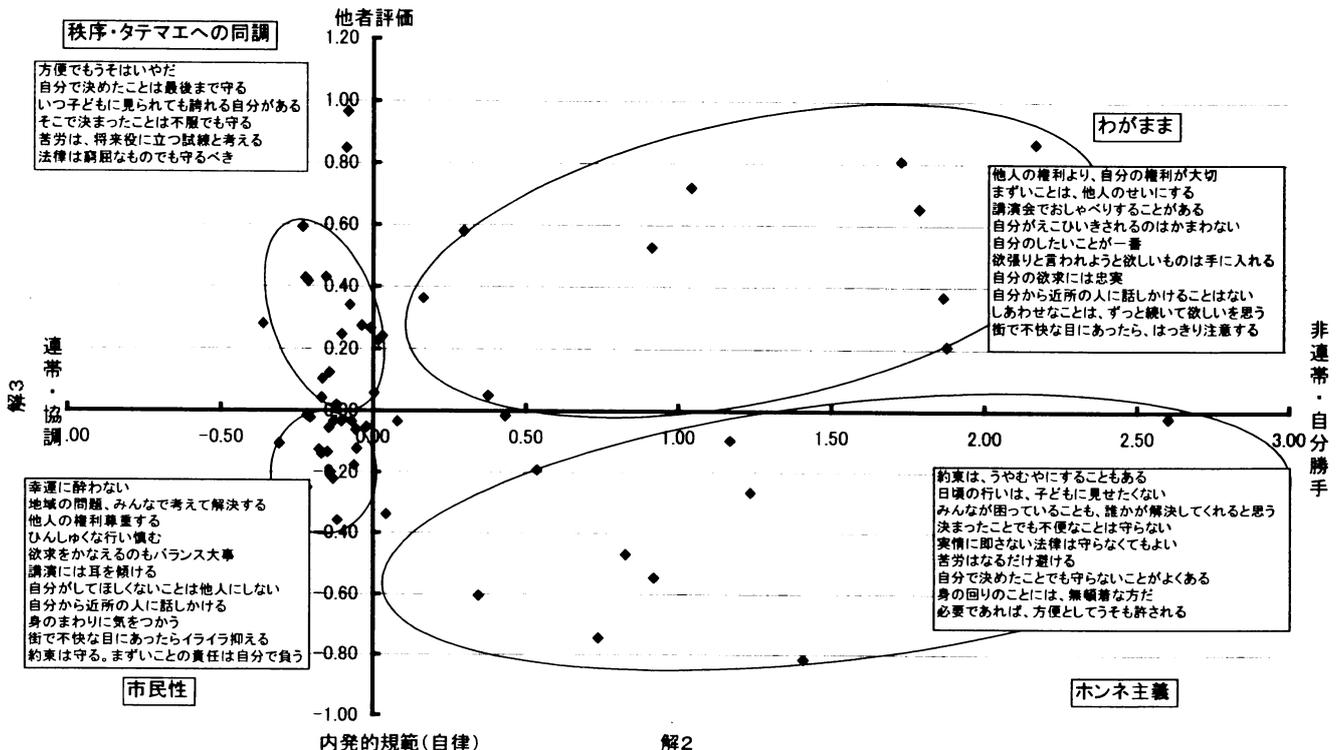
自律項目

- しあわせなことが立て続けに起こると、この幸運に酔っていけないと心を引き締める。
- たとえ欲しいものがあったても、他人からひんしゅくを買うような行いはつつしむ方だ。
- 街を歩いていて不快な目にあったら、イライラせずに気持ちを抑えようとする方だ。
- 自分の欲求をかなえるときも、バランス感覚が大切だ。
- 身のまわりのことには、ある程度気を使う方だ。
- 約束は、できるだけ守るようにしている。

連帯項目

- 地域みんなが困っていることがある時、みんなで考えることで解決の糸口が見えると思う。
- 他人の権利を侵さないように気をかける方だ。
- 講演会や地域の集まりに参加したとき、話し手に耳を傾けるのが礼儀だと思う。
- わたしは、自分がしてほしくないことは、他人にもしない。
- わたしは用事があれば、近所の人にも、自分からきっかけを作って話しかける方だ。
- 何かまずいことが起こったら、その責任は自分で負う方だ。

図6-1:市民性尺度項目のコレスポネンス分析結果



②震災前後での市民性(自律・連帯)の変化

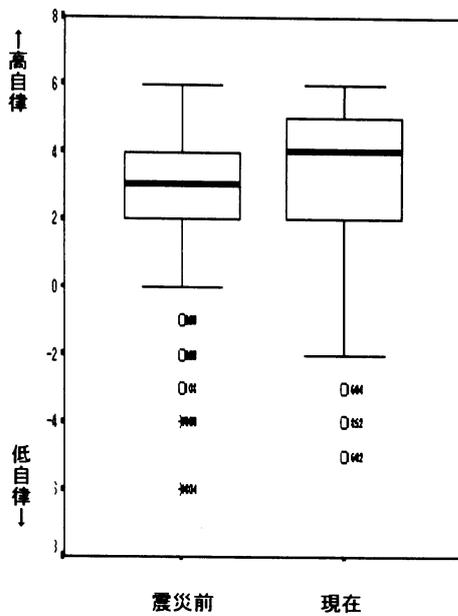


図 2 : 震災前後での自律度の変化

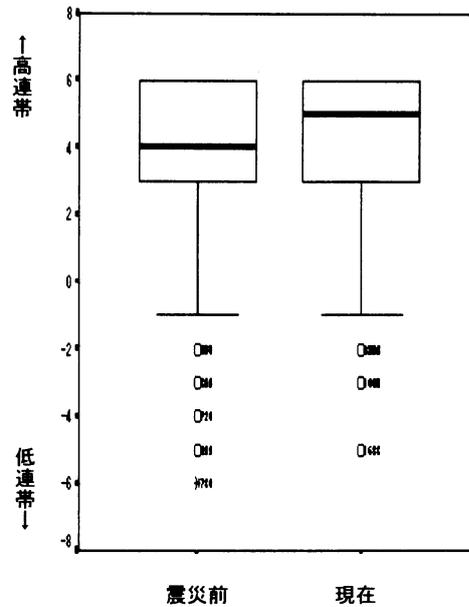


図 3 : 震災前後での連帯度の変化

本調査では、震災前と現在との二つの時点における市民意識を回答者にたずねている。そこで、震災前と現在とで市民意識に変化があるかどうかを調べてみた。具体的には、市民生活に対する四つの態度群に対応する項目について、「はい」と答えた場合に1点を加算するという形で、1)「わがまま」度、2)「ホンネ主義度」、3)「秩序・タテマエへの同調」度、4)「市民性」度それぞれの得点を求めた。それぞれの態度について、震災前の得点と現在の得点の変化を比較したところ、唯一、4)「市民性」度得点にのみ、統計的に意味のある変化が確認された。すなわち、市民性を構成する「自律」得点および「連帯」得点のどちらについても、回答者は震災前と比べて現在の方が得点が高いという結果が得られたのである。これは、震災体験を機に、阪神間市民の自律や連帯に根ざした市民性が高まったことを指し示すものと考えられる。

(※13: 箱ヒゲ図)

③市民性が個人の生活復興に与える影響: 震災前および震災後の市民性と生活復興度との関係

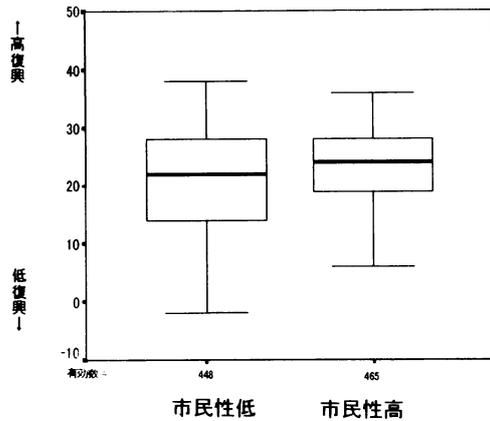


図 4 : 震災前の市民性の高低と現在の生活復興度の関係

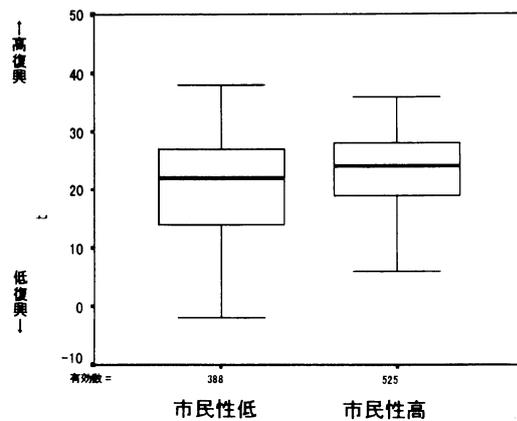


図 5 : 震災後の市民性の高低と現在の生活復興度の関係

最後に、震災前および震災後の市民性と震災からの個人生活の復興度との関係について検討を行った。具体的には、自律度と連帯度の合計得点を、回答者の市民性得点とし、その得点が上位 50%に含まれる場合を高市民性、下位 50%に含まれる場合を低市民性と分類した。そしてその上で、高および低市民性群における生活復興度得点を比較した。生活復興度は、現在の生活復興度（問 36）と生活満足度（問 37）に対する回答をもとに求めたものである。

その結果、震災からの個人生活の復興度と市民性との関係を調べると、市民性得点が高いほど現在の生活の適応度・復興度が高いことが示された。これは、市民性意識は個人レベルにおける生活復興や再建感覚に影響を与えるということを示すものである。

7. 災害の意味づけ

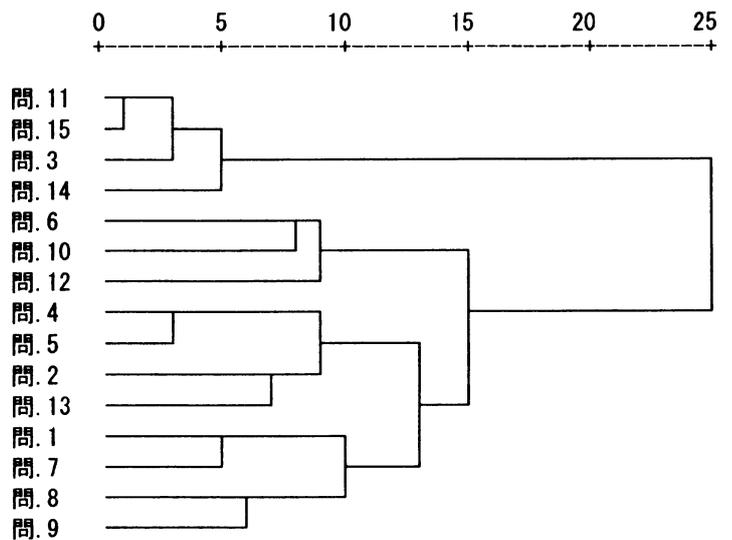
今回の震災を通して、回答者がどのようなことを感じたのかをたずねた。具体的には、「今回の震災を通して、以下のようなことを感じたり、思ったりしたと発言した人がいますが、あなたはいかがですか。あてはまると思うものにはすべて○を、違うと思うものにはすべて×をつけてください」と質問し、以下に 15 項目をあげた。この項目は事前に予備調査を行い、抽出したものである。

県内在住者（標本の無作為抽出により定量評価が可能、n=623）の結果について、いくつかのグループに分類するために、Ward 法によるクラスター分析を行ったところ、4つのクラスターが抽出された。
(※4：クラスター分析)

1 つめは、肯定的体験で、人のこころの強さ、人情のすばらしさを再確認したことであった。2 つめは、善意重視で、人と人・組織とのつながりについてであった。3 つめは、現実重視で、非常事態における、人間の無力さ非力さを再確認したことであった。4 つめは、否定的体験で、人や組織の本性を見せつけられたということであった。震災によって得られた体験は、以上あげた4つに代表されることが考えられる。

「あてはまる－あてはまらない」の割合から全体傾向をみると、震災によって、普段の生活がいかにモロいかわかり（肯定的体験）、地震で新たな縁ができ（善意重視）、非常事態では人は無力である（現実重視）が、人間関係のつながりの弱い人が見殺しになることはなく（現実重視）、普段どおり人間性を持ちながら（否定的体験）、人間のよい面をみせられた（否定的体験）ということが、この震災によって生まれたと考えられる。

○ 県内在住者にみる災害の意味付け のクラスター分析



肯定的体験	11 人の情にふれることができた 15 今思えば、なかなか得がたい体験だった 3 普段の生活が、いかにモロいものかわかった 14 人間は、精神的に強いことがわかった
善意重視	6 障害者は多くの人に守られていることがわかった 10 援助面で、大企業の組織力のすごさを感じた 12 地震で新たな縁ができた
現実重視	4 人間関係のつながりの弱い人は、非常時には見殺しになることがわかった 5 日ごろつちかかってきた人間関係しか、緊急時には役に立たないことがわかった 2 非常事態では、人間は無力になることがわかった 13 日ごろから行っていることだけしか、緊急時にはできないことがわかった
否定的体験	1 普段は隠れていた人間の本性が、あらわになった 7 人のいやな面を見せつけられた 8 マスコミは信用できないことがわかった 9 行政が、冷たいことがわかった

県内在住者 (n=623)

○ 前ページのクラスター分析に用いた質問項目と調査結果

肯定的体験	11 人の情にふれることができた
	15 今思えば、なかなか得がたい体験だった
	3 普段の生活が、いかにモロいものかわかった
	14 人間は、精神的に強いことがわかった
善意重視	6 障害者は多くの人に守られていることがわかった
	10 援助面で、大企業の組織力のすごさを感じた
	12 地震で新たな縁ができた
現実重視	4 人間関係のつながりの弱い人は、非常時には見殺しになることがわかった
	5 日ごろつちかかってきた人間関係しか、緊急時には役に立たないことがわかった
	2 非常事態では、人間は無力になることがわかった
	13 日ごろから行っていることだけしか、緊急時にはできないことがわかった
否定的体験	1 普段は隠れていた人間の本性が、あらわになった
	7 人のいやな面を見せつけられた
	8 マスコミは信用できないことがわかった
	9 行政が、冷たいことがわかった

